

夏の訪れと梅雨の気配を感じるこの頃です。生き物たちも活発な活動を始めています。土いじりをなさる方は^{みみず}蚯蚓にお目にかかることも多くなってきたのではないのでしょうか。その姿はお世辞にも美しいとは言えませんが、その活躍たるや、土壌を豊かにしたり、腐敗物を処理したり、時には昆虫、モグラ、鳥、魚などのえさになったりと、自然界の役に立つ生き物として^{みみず}蚯蚓は私達を支えてくれています。古来より私達の身近にいたからでしょうか。禅の世界では仏道修行の課題、^{こうあん}公案としても取り上げられています。

道元禅師の『正法眼蔵』「仏性」の巻に引かれた公案によると、ある日、^{ちょうさけいしん}長沙景岑禅師のもとに^{じく}竺という役人がやって来てこんな質問をしました。「^{みみず}蚯蚓を二つに切ると、両方とも動いているが、仏性は一体どちらにあるのですか。」すると^{ちょうさ}長沙禅師は一言、「妄想するな。」と答えて一蹴します。しかしそれでは満足出来ない彼は、「でもどちらの^{みみず}蚯蚓も動いているのは事実なのだから、これは一体どう考えたらいいものか。」と食い下がります。^{ちょうさ}長沙禅師は「ただ生命活動が続いているに過ぎん。」と答え、問答を打ち切りました。

何だか噛み合わない問答ですが、質問した側は、仏性つまり仏としての本質、可能性は生き物の体の中に宿っているのだから、体が二つになれば仏性も二つに分かれるのか否かと尋ねたのでしょう。或いは仏性とは生きている者には存在し、死んでしまえば無くなってしまおうのか否かと尋ねたのかもかもしれません。

^{ちょうさ}長沙禅師は仏性というものに対する根本的な誤解を取り除くために「妄想するな。」とたしなめたわけです。当時一般には「あらゆる生き物には皆、仏としての本質、可能性が宿っている」というお経の言葉を通じて仏性は知られていました。しかしそれはともすれば仏としての本質、可能性が無条件に私達の内に具わっているので何をやっても許されるという誤解を生ん

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

でいました。

それに対して道元禅師は、確かにあらゆる存在は仏となる可能性はあるが、それは周囲の物事とどう関わっていくかによるのだとお示しになりました。傍若無人にふるまえばそこに仏性はありません。しかし仏教に則ってふるまえばそこには仏の世界が現れ、仏性の仏としての私達が存在するのです。

世界は常に移り変わり、動き続けています。この無常なる世界の一部である私達は無常なるが故に変わることが出来ます。いつまでも頭の中でごちゃごちゃと考えて妄想を膨らませてばかりいないで、季節が移り変われば土の中から顔を出し、この世界の中で生き生きと自らの役割を担って活動している^{みみず}蚯蚓の姿に仏性のあらわれた姿を見出すべきであると、この公案は語りかけてくれているのではないのでしょうか。

— 終 —